

精神障害は脳の病か？心の病か？ストレスの病か？

精神障害の起こる原因が何かと言うことは昔から問われてきました。特に統合失調症（いわゆる精神病）の病因について研究されてきました。ドイツのグリーゼンガーが「精神病は脳の病である」と言い出して以来、ドイツでは脳の研究が盛んになりました。日本は明治になって開国したときにドイツの医学を取り入れました。そのため精神医学もドイツ流になり、現在に至るまで脳の研究、すなわち生物学的精神医学（生物学的モデル）が盛んになっているのです。

100年以上前にオーストリアでフロイトが精神分析を創始して以来、精神障害が心の葛藤から生ずるという力動精神医学（心理的モデル）も特に第二次大戦後のアメリカにおいて隆盛を極めました。

その二つの立場での争いが激しく、生物学的精神医学の立場の学者は力動精神医学を「脳の無い精神医学」と批判し、力動精神医学の立場に立つ学者は生物学的精神医学を「心の無い精神医学」と、互いに不毛の論争を続けました。

また昔はストレス（環境因）から起こる症状はストレスが無くなると簡単に良くなると理解されてきました。しかし、第二次大戦のナチスドイツのユダヤ人絶滅収容所の生存者や米国のベトナム戦争帰還兵が長年経っても急に当時の苦痛な状況を思い出したり悪夢を見るなど様々な精神症状を残し、決して一過性では済まないことが分かり外傷後ストレス障害（PTSD）の概念が生まれました。

最初に述べた対立する二つの立場に社会的（環境）要因を加えて誕生したのがエンゲルの生物-心理-社会的モデルです。すなわち、いずれか一つの立場だけに病因を見つけようとするのではなく、どのモデルからも理解する必要があるということです。また、病因に対してだけでなく、治療についても同じように考えると、生物学的モデル（脳）に対しては「薬物療法」、心理的モデル（性格）に対しては「心理療法（精神療法、カウンセリング）」、社会的モデル（環境）に対しては「環境調整」がそれぞれに対応します。もちろん当院の診断、治療もこうした理解に基づき行っています。

（参考図書；精神医学の現在、西園昌久著、中山書店、2003）